



Data

監督・脚本：アレハンドロ・ホドロフスキー

出演：ブロンティス・ホドロフスキー／パメラ・フローレス／イェレミアス・ハースコヴィッツ／アレハンドロ・ホドロフスキー／バステリアン・ポデンホーファー／アンドレス・コックス／アダン・ホドロフスキー／クリストバル・ホドロフスキー

👁️👁️ みどころ

1929年にチリで、ロシア系ユダヤ人の子として生まれたというアレハンドロ・ホドロフスキー監督を、本作ではじめて発見！世界は広い。すごい監督が各国にいるものだ。

若い頃は生真面目に映画を作っている、80歳近くになれば、何でもあり！回想録とも言うべき本作で、老監督はあらゆる映画作りの技法を自在に操り、摩訶不思議な映像とストーリーをつくりあげた。

人を食ったような邦題とあわせて、クライマックスの「感動」をしっかりと味わいたい。



■□■この新発見に大満足！■□■

私にとって、映画を観ることは娯楽であると同時に大切な勉強。したがって、映画を観る楽しみの一つは、それまで全く知らなかった素晴らしい監督や俳優を知ることだ。メジャーなものはマスコミで大量に報道されているので大体わかっているが、1980年代に急激に躍進した中国映画については私は2004年にシネ・ヌーヴォで大量に観るまでは全く知らなかった。それと同じように、私は本作のアレハンドロ・ホドロフスキー監督を全く知らなかった。

これは、ポーランドのアンジェイ・ワイダ監督を『カティンの森』(07年)、『シネマルーム24』44頁参照)を観るまでは全く知らなかったのと同じ。また、オーストリアのミヒャエル・ハネケ監督を、『隠された記憶』(05年)、『シネマルーム11』112頁参照)を観るまでは知らなかったのと同じだ。さらに、私はデンマークのスサンネ・ピア監

督を『ある愛の風景』(04年)、『シネマルーム16』70頁参照)を観るまでは全く知らなかったが、その後彼女は『アフター・ウェディング』(06年)、『シネマルーム16』63頁参照)、『悲しみが乾くまで』(08年)、『シネマルーム19』245頁参照)、『未来を生きる君たちへ』(10年)、『シネマルーム27』177頁参照)、『愛さえあれば』(12年)、『シネマルーム31』62頁参照)で世界的に著名な女流監督に成長した。また、イラン人のアスガー・ファルハディ監督も、最初に『彼女が消えた浜辺』(09年)、『シネマルーム25』83頁参照)を観るまでは全く知らなかったが、その後彼は『別離』(11年)、『シネマルーム28』68頁参照)、『ある過去の行方』(13年)で世界的に著名な監督に成長した。

■アレハンドロ・ホドロフスキー監督とは?■

1929年2月にチリ北部のトコピージャという港町で、ロシア系ユダヤ人の子として生まれたというアレハンドロ・ホドロフスキーは、1970年に発表した映画『エル・トポ』が代表作で、ミック・ジャガー、ピーター・フォンダ、デニス・ホッパー、アンディ・ウォーホル、オノ・ヨーコなど当時のアーティストたちを魅了したそうだが、寡聞にして私は全く知らなかった。

本作と『ホドロフスキーのDUNE』(13年)の公開に伴って、『ホドロフスキー新聞VOL. 3』という小冊子が発行されており、その中にはパク・チャヌク、荒俣宏、谷川俊太郎、夢枕獏らが「リアリティのダンス 私はこちら観た!!」という感想の中で、ホドロフスキー監督のことをいろいろと語っている。本作を鑑賞した後でこれを読めば「なるほど」と思えるものも多いが、彼らがホドロフスキー監督や彼の過去の作品をよく知っているのは、彼らがみんな特殊な業界の人だから。私のように、真面目に弁護士稼業を40年間もやっている人間にはホドロフスキーとの接点などなかったのは当然だ。

しかして、今回本作を観たのは、ちょっとした予定の変更と、『キネマ旬報』2014年8月上旬号の「REVIEW鑑賞ガイド」で3人の評論家が4点、5点、4点と高評価をしていたためだが、ホドロフスキー監督という新発見に大満足!

■ロシア系ユダヤ人の、家族の物語といえば・・・■

私はミュージカルの舞台や映画が大好きだが、ブロードウェイ・ミュージカルの『屋根の上のヴァイオリン弾き』は楽しいだけのミュージカルではなく、もの悲しい物語。その主人公ヴィエは、ウクライナ地方の小さな村アナテフカで牛乳屋を営むユダヤ人一家の家長だ。そして、物語はユダヤ教の戒律を軸としてユダヤ人一家の営みが切々と描かれていくから、本来日本人にはなじみの薄いもの。したがって、森繁久彌主演の日本版『屋根の上のヴァイオリン弾き』がロングランを続け、大ヒットしたのは、一種の奇跡だ。

しかして、本作の舞台になるのは、1920年代のチリ。今年のサッカーW杯ブラジル

大会でブラジルがドイツに歴史的な大敗を喫したことは記憶に新しいが、そもそも南アメリカのチリやブラジル、そしてアルゼンチンという国は日本人にはなじみが薄い。私は五木寛之の『戒厳令の夜』（76年）を読んで、チリやその首都サンチャゴのことを少しは知っている。また、学生時代には、1970年11月のアジェンデによるチリの社会主義政権の誕生に大いに期待したものだ。さらに、ミュージカルや1996年の映画『エビータ』で描かれた、アルゼンチンの大統領フアン・ペロンとその妻エビータは有名。しかし、1920年代にチリに登場した軍事独裁政権たるカルロス・イバニェス・デル・カンポ大統領を知っている人はほとんどいないはずだ。

本作は、そんな時代の、そんな舞台におけるロシア系ユダヤ人の物語。それは『屋根の上のヴァイオリン弾き』と同じように日本人には全くなじみのないものだが、さて、そんな本作が描くストーリーは・・・？



(C) photos Pascale Montandon-Jodorowsky (C) "LE SOLEIL FILMS" CHILE - "CAMERA ONE" FRANCE 2013

■□■「何でもあり！」の技法にビックリ その1 ■□■

本作のパンフレットにおけるインタビューで、ホドロフスキー監督は「23年間映画を作らなかった理由は、映画的に言うべきことがなかったからです。私は商業映画監督ではなく、映画で生活しようと思っはてはしません。もしそれなら毎年一本映画を撮らないといけなくなってしまう。誰もが毎年新しく言うべき事を持っているとは思えません。私はマクドナルドではないので、毎日ビッグマックは作りません。」と述べているが、私はこの言葉に感動。なぜならこれは、私がいつも口にしてる「24時間働き、24時間遊ぶ。そんな人生が理想だ」というセリフと、生きる世界は違えども、全く同じ趣旨だからだ。

本作はそんなホドロフスキー監督が23年ぶりに自分の人生をベースにしてつくった物語。したがって、冒頭からスクリーン上に登場してくるのは、現実離れた摩訶不思議なものばかりだ。本作を最初に強烈に印象づけるのは、青い服を着た長い金髪の男の子アレハンドロ（イエレミアス・ハースコヴィッツ）。彼は色が白い鷲鼻のロシア系ユダヤ人だから、同級生から「ピノキオ」と呼ばれてからかわれているらしい。そんなアレハンドロのすぐ側に時々登場してくるのが、その約70年後（？）のアレハンドロで、ホドロフスキー監督その人だ。

ホドロフスキーは大成功している監督だから、ギャレス・エドワーズ監督がハリウッド版『GODZILLA』（14年）に渡辺謙を起用したように、起用するビッグネームの俳優はいくらでもいるはず。しかし、本作でアレハンドロの厳格な父親ハイメを演ずるブロンティス・ホドロフスキーはホドロフスキー監督の長男だ。また、アレハンドロ少年に瞑想を教える、いつもほとんど裸に近い姿で生活している行者はホドロフスキー監督の次男である、クリストバル・ホドロフスキーが演じている。そして、本作後半にイバニェス大統領の暗殺計画とその実行という壮大な（？）ストーリー展開の中で大きな役割を果たすアナキストは、四男のアダン・ホドロフスキーが演じている。

身内だからやりやすい面はあるだろうが同時に、かえってやりにくい面も多いはずだが、さて本作に見る、そこらあたりのホドロフスキー監督の手綱捌きの妙は・・・？

■□■「何でもあり！」の技法にビックリ その2■□■

「ウクライナ商会」を営んでいるハイメがスターリンの崇拜者であり、熱心な反体制派の共産党員という設定が何とも奇妙で面白い。これがリアルなのか、でっち上げなのかはわからないが、チリは目下イバニェス大統領の独裁政権下にあるのだから、共産党員が弾圧されているのは当然。しかも、アレハンドロ一家はウクライナから移民してきたロシア系ユダヤ人だから、チリ北部の港町トコピージャで生きていくのは大変。そう考えると、ウクライナ商会が何とか維持できているのは、いかにも「肝玉玉母さん」のようなハイメの妻サラ（パメラ・フローレス）の元気さのおかげだろう。

ホドロフスキー監督の「何でもあり！」の技法が発揮されるのは、サラのセリフがすべてオペラ並みの歌唱で語られること。ミュージカル映画に違和感を持たれる方はサラのこんなセリフ回し（？）に違和感を持たれるのは当然だが、本作ではそれもホドロフスキー監督の何でもあり！の技法の一つとして受け入れる必要がある。性格的に見ても、あまりにも息子に厳格なハイメの異常性は明らかだが、アレハンドロを自分自身の父親の生まれ変わり信じ、金髪巻き毛のカツラを被らせ「お父様」と呼ぶサラも、ちょっと異常・・・？

本作導入部では、トコピージャというチリの港町で、ウクライナ商会を営みながら生活するアレハンドロたち一家の姿が描かれるが、こんなケッタイな映画をはじめて観る人も多いのでは・・・。

■□■「何でもあり！」の技法にビックリ その3■□■

『JSA』（00年）（『シネマルーム1』62頁参照）、『オールド・ボーイ』（03年）（『シネマルーム6』52頁参照）、『親切なクムジャさん』（05年）（『シネマルーム9』222頁参照）、『イノセント・ガーデン』（12年）（『シネマルーム30』131頁参照）等々有名な韓国のパク・チャヌク監督は、『ホドロフスキー新聞 VOL. 3』の中で、ホドロフスキー監督のことを、「彼は魔術師であり、錬金術師であり、戦士であり、ツアラトゥストラ。どんな事もできる上に超現実主義者。“死ぬ”なんて退屈すぎて耐えられないことなのですから」と語っている。

そんなホドロフスキー監督なればこそ可能なシーンの第一が、腕や足を失った大量の炭坑夫たちの登場だ。彼らはイバニェス政権の犠牲者だが、ハイメは共産党員であるにもかかわらず彼らを毛嫌いし、まるでゴミのように扱っている。このように身障者をモロに差別するシーンは日本では厳禁だが、ホドロフスキー監督の手にかかれば、何でもあり！

また、後半に至ってあっと驚くのは、ペストに罹患し、ほとんど死にかけたハイメを「ウクライナ商会」に迎え入れたサラが、自らの放尿によってそれを癒すシーン。まるで、イエス・キリストの再来のようなシーンだが、チリ生まれの本物のオペラ歌手パメラ・フローレスが堂々とカメラの前で放尿シーンを見せることにビックリ。これこそ、ホドロフスキー監督の、「何でもあり！」の技法なればこそ可能なシーンだろう。

■□■アイヒマンは「悪の凡庸」、するとイバニェス大統領は？■□■

イバニェス大統領の軍事独裁下でハイメたち共産党員が集会を開くシーンや、弾圧を避けるため党員証を焼き捨てるシーンを見ていると、独裁政権下のチリにおける共産党の活動はその程度？と思ってしまう。しかし、ある日遂にハイメはアレハンドロとサラに別れを告げ、ポケットに一丁のピストルを忍ばせて、イバニェス大統領暗殺の旅に出ることに。そこでしゃしゃり出てくるのがアナキストの青年だが、さて彼らが立てた暗殺作戦は？それがまた、ホドロフスキー監督特有の面白さなので、それはあなた自身の目でじっくりと見てもらいたいが、それ以上に面白いのは、ホドロフスキー監督が描くイバニェス大統領の人間性だ。

ちなみに、『ハンナ・アーレント』（12年）はアイヒマン裁判を傍聴する中で「悪の陳腐さ（凡庸さ）」を描いたユダヤ人の女性哲学者の物語だった（『シネマルーム32』215頁参照）が、この映画を見るまでそんな物語を知っている日本人はほとんどいなかったはずだ。ハンナは、「ユダヤ人問題の最終的解決」（ホロコースト）に関与し、数百万人のユダヤ人を強制収容所へ移送するに当たって指揮的役割を果たしたアドルフ・アイヒマンを、彼の裁判の傍聴の中でじっくり観察した。その結果、アイヒマンを極悪非道の大悪人と認定せず、上からの命令を忠実に実行しただけの「中間管理職」風の典型的な「小役人」

と分析したわけだ。要するに、物事の本質を哲学的につつきつめて考えていけば、アイヒマンは「悪の陳腐さ（凡庸さ）」にすぎなかったというわけだ。

そんな視点でハイメがイバニェス大統領のことを分析した、かどうかは知らないが、いざ暗殺の現場に立ち会う中、少なくともハイメにとってイバニェス大統領は暗殺すべき対象の極悪非道の間人ではなかったことはまちがいない。そのため、共謀し、同行していたアナキストは逆に殺されてしまったものの、ハイメはイバニェス大統領から命拾いの恩人と感謝されることに。「褒美は何でも与える」と言われて、それを断ったハイメが希望したのは、自分は馬が好きだから「大統領の馬の世話係を」というもの。そこで、与えられたハイメの仕事はイバニェス大統領が何よりも愛する愛馬の世話だが、何とこれがハイメのハマリ役に。そんなストーリー展開を見ていると、ハンナがアイヒマンを「悪の陳腐さ（凡庸さ）」と表現したことに対比すれば、ハイメはイバニェス大統領のことをいかに評価するのだろうか？

■□■放浪の旅はいつまで？家族の和解は？■□■

本作導入部で見せる、「男は強くなければダメだ！」とアレハンドロに対してハチャメチャなスパルタ教育を施すハイメの姿を見ていると、いかにも肩肘張って、無理をして人生を生きることが明らか。また、ハイメがスターリンを信奉していることはまちがいなさそうだし、共産党の活動を真面目にやっていることもまちがいなさそうだが、さてそれが本当にハイメの思想信条に合致しているのかという疑問で、それどころか無理をしている感がある。さらに、ハイメの本音はえらくグラマーな妻サラとずっと一緒に生活したいことにあることは明らかだから、サラとアレハンドロを家に残したまま、イバニェス大統領暗殺の旅に出るのもやはり無理筋だったはず。そんな思いでハイメの行動を見ていると、イバニェス大統領の暗殺に失敗した後、大統領の愛馬の世話をしながらひっそりと片田舎で暮らしているときが一番人間らしい表情をしていることがよくわかる。

現実のホドロフスキー監督がどんな人生を歩んだ中で、監督として大成功を収めたのかは知らないが、自分自身の人生を少しだけ現実を織り交ぜながら大きな想像力を働かせて考えてみると、ホントはこんなんびり、ひっそりした生活に憧れていたのでは…？

何かと波乱の多かった本作も、愛馬の死亡、多額の退職金(?)をもらってのイバニェス大統領との別れの後、いよいよ終局に向かうが、そこでハイメの身体に起きた異変がペスト。これによって遂にハイメもアウト。スクリーン上にそんな雰囲気はただよってくるが、そこで起きる奇跡は前述のとおりだ。しかして、クライマックスは意外にも…？『リアリティのダンス』という人を喰ったような邦題の意味をよく考えながら、そのクライマックスをしっかり味わいたい。

2014（平成26）年7月30日記